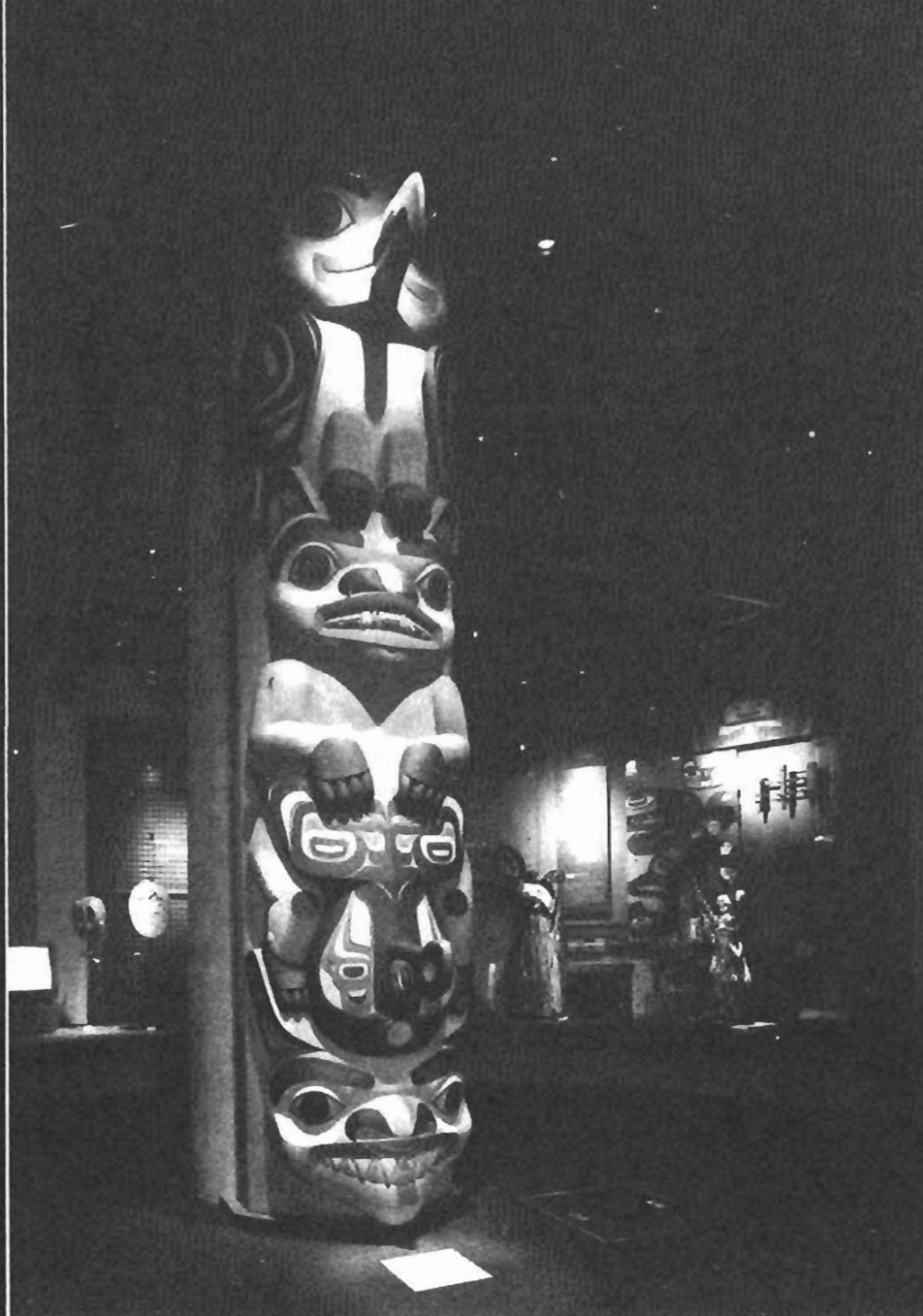




時間と空間を超えてきた資料が
北の文化を話しはじめる

北方民族博物館はユーラシア、北アメリカ、
グリーンランドの先史時代から現代まで、
北方文化を対象とする博物館です。

シベリアのトナカイ遊牧民 ネネツ展

1991.7.21~8.24

はじめに

ネネツは、ソ連・西シベリアのツンドラ地帯に住む民族で、大規模なトナカイ飼育をおこなっています。人口は約3万人で、ネネツ語を話します。

今回の特別展で展示のネネツの資料は、野外民族博物館リトルワールド（愛知県犬山市）が、1986年よりおこなったソ連科学アカデミー民族学研究所（モスクワ）との共同調査の一環として収集されたものです。また、トナカイ飼育文化の比較のためネネツの西、スカンディナビアにくらすサミ（ラップ）の資料も同様にリトルワールドより借用し、展示しています。

トナカイ飼育の歴史

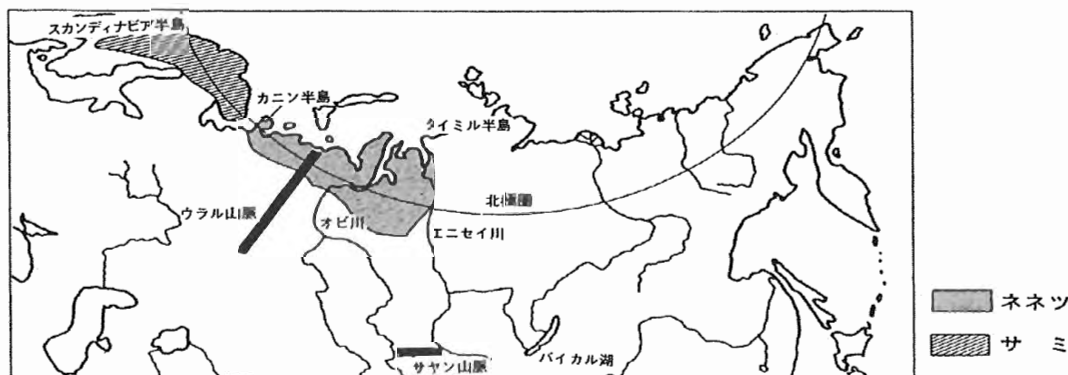
トナカイは北半球のツンドラ地帯から針葉樹林帯にかけて棲息し、北方の採集狩猟民にとっては狩猟の対象として極めて重要な動物でした。ユーラシア固有のトナカイ飼育は、南の馬飼育文化の影響を受けて、今から3千年ほど前に始まったとされ、中央シベリアのサヤン山脈とバイカル湖周辺が起源と考えられています。その後、トナカイ飼育文化は民族の移動や技術の伝播などにより拡散し、広くシベリアの諸民族に受け入れられるようになりました。

ネネツの場合、飼育しているトナカイは橇を引かせるための動物であり、飼育頭数も数十頭程度で、殺して肉を食べるのはもっぱら野生のトナカイでした。ところが、16世紀から始まったロシア

人のシベリア進出により、ネネツなどシベリアの先住民族はクロテン、リス、キツネなどの毛皮と交換で、鉄や繊維製品など生活に必要なものを手に入れました。しかしこれらの動物を捕りつくすと、橇を引かせるためにだけ飼育していたトナカイから、肉や毛皮をとってロシア人との取引商品とするために、飼育頭数を増やす必要が生まれてきました。このような経過の中から、今日みられるような大規模なトナカイ飼育が発生したのが18世紀末から19世紀初頭でした。

トナカイ遊牧

ネネツの主な生業は、季節的な移動をともなう大規模なトナカイ飼育で、一年中、トナカイの餌となるコケや草を求めて遊牧をおこなっています。トナカイの群は、夏の間永久凍土の表面が融けるツンドラ地帯に移動し、草や木の葉を餌とします。冬になると比較的雪が少なく、餌となるコケが得やすい南の森林ツンドラ地帯に移動します。その距離は長いときには1千キロメートルにもおよびます。トナカイは移動性の高い動物であるとともに、群れる習性をもつ動物です。その習性を利用して、ネネツは高度なトナカイ飼育技術を獲得しました。最近の調査でも、約1千頭のトナカイの群を1人の牧人と1頭の牧犬で管理していたという報告があります。犬は群からはずれたトナカイを追いかけて、群をまとめて牧人の手助けをします。





マリツァとよばれるネ
ネツの男性の毛皮服は、
薄くて軽く、柔らかな
トナカイ幼獣の毛皮で
つくられます。フード
には特に生まれたての
トナカイの毛皮が用い
られます。

トナカイの利用

トナカイは屠殺され、肉や血、内臓を食糧として、またその毛皮や骨、角を衣類、装飾品、道具などに加工して利用するとともに、橇を引く動物として重要です。

ネネツの主要な食糧はトナカイの肉で、おもに煮て食べますが、生や凍らせて食べることもあります。

食糧として利用するほかに、トナカイは余すところなく利用されます。そのなかで毛皮が最も重要なものであり、衣類や住居の覆い、敷物として使われます。

ネネツのトナカイ橇は一般にハンとよばれ、座席を支える支柱が正面から見るとハの字型に開いていて、側面から見ると後方に傾斜しているのが特徴です。

橇は一年中使用され、雪のない夏のツンドラでも走行できるように、接合部分にはぞを用いるなど柔構造となっています。3～7頭のトナカイで橇を引き、手綱は一番左の特に訓練されたリーダーのトナカイに結ばれます。橇を操る者は手綱とチュルという細長い棒で、橇の進む方向、スピードやトナカイの群を制御します。移動する際には乗用橇を先頭にして、そのあとにさまざまな荷物



用橇が縦列を作って進みます。

住民としてのテント

伝統的なネネツの住居は円錐形のミヤとよばれるテントです。トナカイの移動にともない解体されて橇で運ばれ一年中利用されます。30～50本の支柱を用いてテントを建て、冬は短く刈り込まれたトナカイ皮の覆いを二重にかけます。夏は布製のテント地をかけますが、以前は白樺樹皮を縫い合わせた覆いを使用しました。

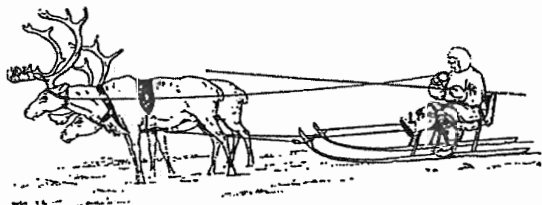
内部の中央には炉を設けますが、今では炉の代わりにストーブが使われています。ストーブの両側には木の板が敷かれ座席となり、座席とテント地の間は寝所となります。

家族は基本的には夫婦と未婚の子供からなり、トナカイ遊牧の際にテントで一緒に生活する単位となります。

写真はV. I. ヴァシーリエフ氏が撮影したもので、野外民族博物館リトルワールドより借用しました。



トナカイ飼育は男性の仕事で、テントを建てたり、解体したりする作業は女性の仕事です。



北海道における先史時代の海獣狩猟

講師／国立歴史民俗博物館 西本 豊弘 氏

海獣狩猟文化は、縄文期をはじめ多様な日本の先史文化の流れのなかに、北方的要素の一つとして認めることができます。特に、北海道の先史文化では、海獣狩猟がより大きな位置を占めています。5月12日に開かれた講座では、北海道の縄文期からアイヌ期までの海獣狩猟文化の在り方について、国立歴史民俗博物館の西本先生に、最新のデータを交えたお話をうかがうことができました。

西本先生は、過去の人間が、動物とどのように関わりをもち、動物をどのように扱っていたかを遺跡から発見される動物遺存体（骨や歯、角など）の分析を通して研究されており、これらの調査から、当時の人々が海で捕獲した動物の内容とそれらを捕獲するための道具、特に銛の形態の変化から、北海道の先史時代における海獣狩猟文化について論じられました。

縄文文化期の海獣狩猟

はじめに、海獣狩猟は古くから日本各地で行われ、縄文期においては東北日本のオットセイ、アザラシ鯨に対し、西南日本では銛を伴わないイルカ鯨が中心で、大きく2つの海獣狩猟文化圏があることを指摘され、さらに、北海道の海獣狩猟の内容は、各遺跡が臨む海域における海獣類の生態を反映したものとなっていることを次の事例から述べられました。

・内浦湾に面する伊達市・南有珠6遺跡では、オットセイの幼獣骨が最も多く、次いで2、3才の若

獣であることは、越冬のため南下し湾内に入ってきた群れを捕獲したことを示し、時代は異なるが湾沿岸の遺跡（北黄金貝塚・入江貝塚・小幌A遺跡）でも南有珠6と同様な傾向を示している。



遺跡名

- | | |
|----------|-------------|
| 1. 北黄金 | 9. 香深井A |
| 2. 南有珠6 | 10. 朝日トコロ貝塚 |
| 3. 入江 | 11. 大曲洞穴 |
| 4. 小幌A | モヨロ貝塚 |
| 5. コタン温泉 | 12. タンネウシ |
| 6. 戸井 | 13. オタフク岩洞穴 |
| 7. 寺町 | 14. オンネモト |
| 8. 茶津 | 15. 東銅路 |



- ・津軽海峡に臨む戸井町・戸井貝塚の骨塚に含まれるオットセイは幼獣が少なく、雌成獣が多いことから対馬暖流と親潮との潮境にあたる戸井沖にオットセイの雌越冬群のいたことが想定される。
- ・日本海側の松前町・寺町貝塚では、オットセイの雌の回遊コースに臨みながら出土例は少なく、アシカ、トドの骨が多く出土することから、同遺跡と対峙する松前小島にこれらの繁殖場があったのではない。
- ・積丹半島基部の泊村・茶津貝塚でもアシカ、オットセイが多く捕獲されていたことが、多量に発見された釣針の材料がアシカ、オットセイの犬歯であることから分かる。

これらの遺跡の分析から捕獲していた動物種だけではなく、捕獲した季節や過去の回遊の状況、繁殖鳥の存在など興味深い事実が示されました。

北海道東・北部の海獣狩猟と銛の形態

道東地域では縄文期の海獣狩猟の報告例は少なく、網走市・大曲洞穴、常呂町・トコロ朝日貝塚における出土例に触れた後、道東・道北地域で注目される海獣狩猟はオホーツク文化にみられること、例として礼文島・香深井遺跡における多くのオットセイ雄成獣骨の出土状況を、またアザラシも多く狩猟されていたこと、さらに特徴として鯨類（ザトウクジラ・セミクジラ）を積極的に捕っていたことを挙げ、これらの狩猟文化とアイヌ文化との繋がりを示唆されました。

海獣狩猟に用いられる銛の形態の変化や、現在のところ道東から発見されたものが我国で最も古いことなどに触れ、最後に、道東の羅臼町、オタフク岩遺跡での最近の調査で、続縄文文化からアイヌ文化までの銛の形態の変化を示す良好な資料が得られたことをご報告いただきました。

○平成3年度第1回講座

北方の舟

講師／渡部 裕 (当館学芸課長)

北方にくらす人びとの生活を支えてきた舟についての講座を4月21日開催しました。講師は渡部裕学芸課長。50余名の講座参加者をまえに、ビデオ上映をまじえ約1時間半にわたって話しをしました。

はじめに北方の舟が、民族、地域(自然環境)、使用目的によって多彩であることに触れ、北方の人びとは、狩猟や漁撈の時、人や荷を運ぶ移動の手段に、儀礼の舞台に、戦闘艦にと、生活のいろいろな場面で舟を使用してきたこと、またこれらの目的に応じて様々な舟があり、それぞれに工夫が施されていることを、イヌイトや北米インディアン、アイヌなどの例を挙げながら述べました。次に、舟の材料となるのは、板、丸木、流木、樹皮、動物の皮などで、材料には地域(自然環境)が反映されていること、それぞれの材料の特徴がいかされていることを説明し、材料と地域(自然環境)の関わり方の例として、イヌイトのカヤックには普通アザラシの皮がはられるが、内陸ではカリブーの皮が使われていることをあげました。また舟は短期間使用することを目的とするか長期間使用することを目的とするかで製造方法や手入れ具合が違っているということ、イヌイトのカヤックは流木の枠にアザラシやカリブーの皮をはって



つくられるのにたいして、クリー・インディアンやシベリアの樹皮舟は、さきに樹皮で外側をつくらから内側に支えの材をいれていくという点で大きく異なっていることなど、舟のいろいろな製造方法をビデオをつかって紹介しました。

最後に今後の北方の舟についての研究課題をまとめて講座を終了しました。

○平成3年度第1回講習会

北方民族の有用植物

講師／渡部 裕、齋藤玲子(当館学芸員)

平成3年度第1回講習会は、6月9日(日)、北方地域の人と植物のかかわりについて、具体的な植物の利用方法をとおして考えてみることを目的に開催しました。自然環境や伝統文化の違いを反映し、地域や民族により植物の利用はさまざまですが、今回は、北海道・サハリンに焦点をしほりアイヌ、ニブフ、ウイльтаにおける植物利用の事例を中心に講習を行いました。

講習会の前半は、講堂で北方の植物利用の概要について、テキストや民族資料を用いて食用、薬用、造型素材としての利用、光熱源としての利用、信仰の対象や儀礼としての利用など精神文化にかかわる植物など、事例をおりまぜながら事前の解説を行いました。



後半は会場を野外に移し、館周辺の林内を巡りながら、関係する各種の植物を観察し、利用する部位や季節、加工方法など具体的な解説を行いました。天候にも恵まれ、約20名の参加者は新緑の林内で、齋藤学芸員の説明に熱心に耳を傾け、質問も多く寄せられました。また、参加者から、自身の山菜や薬用植物の利用方法も披露されるなど情報交換の場ともなりました。

約1時間半の野外観察で、40種ほどの有用植物が確認され、多くの植物が利用されてきたことや意外な利用方法があることなど、環境を巧みに利用してきた北方の人たちの知恵にあらためて感心するとともに、自然の恵みの大きさをよく知っていたこの人たちに学ぶべきことがもっとあるのではと思いました。

「世界の台所博物館」の著者で建築家の宮崎玲子さんが、3月6日当館を訪れました。

常設展示にあるイヌイトの堅穴住居のジオラマ製作の経緯を少しお話したところ、製作の際に住居全体の構造や木部分の接合の仕方などのデータの提供や製作に関する助言をしてくださった方々は、宮崎さんが事務局をなさっている日本民俗建築学会に関わりのある方ばかりだということがわかりました。手紙のやりとりをとおして、ジオラマ製作にご支援とご協力をいただいた、まったく面識のない先生方は実はこの学会で結ばれていました。

第18回をむかえる今年度の大会は、5月17日から4日間、北海道工業大学（札幌市）などを会場におこなわれ、私も初めて大会に参加しました。17日は午後から北海道開拓の村の見学、18日は総会、遠藤明久先生（道工大名誉教授）の記念講演

日本民俗建築学会

5.17~20 於：札幌、二風谷他

会、研究発表、懇親会がありました。研究発表では、日本の民家研究のみならず、「中国農村の土造住居」という題で洛陽のヤオトンと福建省の環形土楼住居に関する発表や中国内蒙古における伝統的な住居とその変容過程についての発表がありました。また、民俗建築の研究に功績のあった方に贈られる第2回竹内芳太郎賞が国立民族学博物館の杉本尚次先生に授与されました。

19日は「追ニシン文化と開拓文化」というテーマで道央の厚田、浜益、江別、栗山、栗沢をバスで回り、ニシン番屋や出身母村の住宅形式を再現した農家住宅などを見学しました。そのあと平取町二風谷に向いました。ここではアイヌの住居チセを会場としてお借りし、次号で学会誌が100号をむかえることもあり、お酒を酌み交わしながら「民俗建築：回顧と展望」というテーマで夜が更けるまで討論をしました。翌20日は、二風谷アイヌ文化資料館を見学後、解散となりました。

（佐々木 亨）

国連は世界の先住民がおかれている現状を知り、先住民の権利に関する国際的基準をつくるため、1993年を「国際先住民年」と定め、権利宣言草案作成を進め、そのための作業部会として「国連先住民会議」を設け検討しています。

北海道ウタリ協会の招きに応じた同会議のエリカ・ダイス議長らの来道を機会に、北海道ウタリ協会、北海道新聞社の主催で標記のシンポジウムが、5月21日、道新ホール（札幌市）で開催されました。

ダイス議長の基調講演では、人権保障にはたす国連の役割や重要性、先住民に対する同化政策からの転換、「先住民族の権利に関する世界宣言」採択のもつ意義、「国際先住民年」をきっかけとした動きへの期待などが述べられました。これらを受けて、コーディネーター・北海道教育大学札幌分校助教授・常本照樹氏の司会により、ダイス議長を

国際先住民年とアイヌ民族

—先住権とアイヌ新法について考える—

5.22 於：札幌

交え、市民外交センター・上村英明氏、目白学園女子短期大学助教授・スチュアート・ヘンリ氏、北海道ウタリ協会理事長・野村義一氏、衆議院議員・鳩山由紀夫氏をパネリストに、問題点について討論されました。

先住民族と先住権について、またどのように先住権を実現させていくかなどが中心に話合われました。海外の先住民運動の実状や先住権とはなにか、アイヌ新法案における先住権などが報告され、また、国民として平等であっても先住民族の特別な権利を考える必要があるなどの意見が出されました。とくにアイヌ民族の実状については、北海道以外では知られていない、権利回復により地道な努力が必要であるなどの指摘もあり、最後にダイス議長からアイヌ新法の早期制定をもとめるコメントがくわえられました。

なお、5月28日に東京でも同様のシンポジウムがもたれています。

（渡部 裕）

Q 博物館の正面にあるモニュメントには何か意味があるのですか。

A 建物のエントランスホールにあたる塔は、北方地域の居住形態として広く利用されているテントをイメージしていますが、モニュメントも全体の形はこの塔が基本となっています。

そして、下の自然石は過去、中央の角錐部分のミカゲ石は現在、上部のブロンズは未来を表現しています。これは、博物館の使命である「未来を切り拓くために、あらゆる次元で過去と現在を保存すること」を象徴しています。

また、先端に突き出たステンドグラスは北の方角を指し、このひょうたんのような形は、グリーンランド・イヌイト女性の結い上げた髪型をデザインしたものです。



(編集部)

Q 常設展示室のトーテム・ポールは、野外にそびえるものに較べると形や大きさが違いますが、これはどのようなトーテム・ポールですか？(表紙の写真参照)

A トーテム・ポールというと高さが10m以上の木に動物や人間の彫刻を施したものを思い浮かべることでしょう。

トーテム・ポールは、もともと北アメリカの北西海岸インディアンがつくる彫刻柱のことで、そこには家の所属する集団が所有する紋章としての動物や、神話に登場する人物が刻まれています。種類としては、家のそばに独立して高くそびえる「独立柱」、死者の墓地に立てる「墓柱」、家の正面の壁の中央にはめ込んである「入口柱」と当館に展示している「家柱(ハウス・ポスト)」の4つがあります。一般にトーテム・ポールという一番目の「独立柱」のことと思われるようです。

当館のトーテム・ポールは「家柱」で、北西海岸インディアン・トリングット族出身の彫刻家

Wayne G.Price氏の作品で、常設展示の完成に合わせて製作されました。高さ4.2m、直径1mです。「家柱」は、木造住居の室内の四隅近くにそれぞれ一本ずつ立っていて、屋根を支えています。この家柱も、常設展示室の天井を支える3本の構造柱のひとつに取り付けられていて、本来の機能を想像できるように展示しています。また、円形の「北方の精神世界」のコーナーの中心に設置しており、この空間の象徴となっています。(学芸課 佐々木)

シンボルマーク決定！



当館職員から募集した8点の候補のうち、投票によって右の案がシンボルマークに決定しました。下の線は大地を、中央の三角はテントを、上の点は北極星を表しています。博物館ロゴ同様、かわいがって下さい。

「友の会」発足のお知らせ

一人でも多くの方に、北方諸民族の文化を知っていただくための、「北を愛する」仲間の集まりです。

10月からの発足にむけて、ただいま準備を進めています。会員の特典、会費は次のように予定しています。

＜特典＞

- ・常設展、特別展の無料観覧
- ・機関誌、友の会だより(ともに季刊)の送付
- ＊ただし、今年度は2回ずつの発行になります。
- ・事業開催のお知らせ

＜会員の種類と年度会費＞

- ・個人会員 3,000円(ただし今年度は2,000円)
- ・法人会員 10,000円(一口)
- ・終身会員 50,000円

お問い合わせは当博物館まで(〒093 北海道網走市字潮見313-1 TEL 0152-45-3888)

寄贈資料紹介

○木偶

帯広市の佐藤喜一氏よりウイルトの木偶3点が寄贈されました。

○被り物、削りかけ

札幌市の池上二良氏より、ウリチのシャマン用被り物1点、舞踏用削りかけ2点が寄贈されました。

執筆ならびに出版社より

贈呈をうけた書籍(2月～5月)

順序は、著・訳者、書名、出版社
海と列島文化1,2,3,5,9巻 小学館
民族の世界史2～15巻 山川出版社
Luciana Gabbrielli "Les Mongols"

Industrie Grafiche Editoriali
—— "Siberia e Siberiani" Serarcangeli Editore

Josef Kreiner und Hans-Dieter Ölschleger
"Ainu" Rautenstrauch-Joest-Museum
—— "Les Aïnoues" Crédit Communal
Чувер Таксами "Живые родники" Дальневосточное книжное издательство
Ч. М. Таксами и В. Д. Косарев
"Кто вы, айны?" Мысль
Таксами氏著書6冊

Louise Bäckman "Så jäva" Almqvist & Wiksell International

Barbara Sweetland Smith & Redmond J. Barnett ed. "Russian America"

Washington State Historical Society
伊藤せいち 網走湖と女満別のアイヌ語地名、常呂町のアイヌ語地名 オホーツク文化資料館

伊藤公平 くねっぶの文化財シリーズNo. 8～9 訓子府町教育委員会
宮崎玲子 世界の台所博物館 柏書房
スチュアート ヘンリ 北アメリカ大陸先住民族の謎 光文社

朝 克他編 ソロン語基本例文集 北海道大学文学部



池上教授と当館館長

主な来館者

4/30 竹田津実氏(動物写真家・小清水町在住)

5/25 タイ・社会科学協会よりC. チュムワッタナー氏

5/26 日ソ極東・北海道博物館交流協会A. N. ボチャルニコフ氏ら一行5名

5/26 カナダより「マスタース・オブ・ジ・アークティック展」関係者、C. スティープンス氏他6名

6/10 倉田公裕氏(明治大学教授)
遠藤明久氏(北海道工業大学名誉教授)

6/18 サハリン郷土博物館長他3名

6/22 池上二良氏(札幌大学教授)

6/27 荒井信雄氏((社)北海道地域総合研究所専務)

6/29 筑波大学博物館学実習(前田潮助教授、学生15名)

観覧者動向4月～6月

4月 1,433名

春まだ浅く、観覧者も少ない月でしたが、月末日曜日には200名を越えました。

5月 4,143名

ゴールデンウィーク期間中雪のちらつく日もありましたが、7日間で1,800名の観覧者を迎え、館内も賑わいました。

6月 3,176名

小・中学校の児童生徒による団体観覧の件数も増えてきました。

なお、2月10日オープン後3月までの観覧者数は、特別展も含めて7,180名となっております。

7～9月の行事

7/21～8/24 第2回特別展

「シベリアのトナカイ遊牧民ネッツ展」

7/28 平成3年度第1回講演会

「シベリアのトナカイ遊牧民」

講師/佐々木史郎氏(大阪大学助教授)

8/10 平成3年度第3回講座

「トナカイの社会誌～北欧サミの生活」

講師/葛野浩明氏(聖心女子大学講師)

9/8 平成3年度第2回講習会

「民族映像の現状」

講師/岡田一男氏(エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ日本代表)

7/1～26 川西オホーツク遺跡発掘調査(湧別町)；青柳主任学芸員が現地で調査を行っています。次号の博物館だよりで概要を報告します。



発掘風景

編集後記

特別展をひかえ、慌ただしいなかでの第1号発行となりました。1年に4回の「たより」ですが、今回は連載するコーナーや期間中のさまざまな報告など、定期行物としての紙面構成に時間をかけました。先年度末に発行しました「開館特集号」についての感想や反省もふまえ、北方民族博物館らしい内容づくりに努めたつもりです。ご意見・ご感想等をお寄せ下さると幸いです。

これからも、北海道ならではの情報発信を続けていきたいと考えています。